

context-free grammars の associate languages の  
生成する full semi-AFL について

東大 理 田中 秀尚

### §1. 序

context-free grammars の拡張として様々な regurated rewriting systems (例えば, matrix grammars, control grammars, programmed grammars など) が考案されており, 互いに密接な関係を持っている。本稿では matrix languages 全体  $M^A$  の研究手段として, context-free grammars の associate languages 全体  $\mathcal{A}$  の生成する full semi-AFL  $\hat{\mathcal{L}}(\mathcal{A})$  を考案することにしよう。

定義 1.  $G = (V_N, \Sigma_T, X_0, P)$  を context-free grammar (以後 ctg と略記) とし,  $P$  (productions の集合) を alphabet みなすことにしてよう。

$\alpha \in P^*$ ,  $u, v \in (V_N \cup \Sigma_T)^*$  とするとき,  $u \xrightarrow{G}^* v$  ( $\xrightarrow{G}^*$  は,  $u$  から  $v$ への derivation の control word である) を次の

ように定義する。

(i) 任意の  $(V_N \cup \Sigma_T)^*$  の元  $u$  に対して,  $u \xrightarrow{G}^* u$ 。

但し,  $\lambda$  は empty word を示す。

(ii)  $u, v \in (V_N \cup \Sigma_T)^*$ ,  $\pi = X \rightarrow z \in P$  とすると,

$uXv \xrightarrow{G}^* uzv$ 。

(iii)  $u \xrightarrow{G}^* v$  かつ  $v \xrightarrow{G}^* w$  ならば,  $u \xrightarrow{G}^* w$ 。

$G$  の associate language  $A(G)$  (Moriya, 1973) を次  
で定義する。

$$A(G) = \{\alpha \in P^* \mid \exists w \in \Sigma_T^*, X_0 \xrightarrow{G}^* w\}.$$

各  $n \geq 1$  に対して  $A(n)$  を

$$A(n) = \{ A(G) \mid G = (V_N, \Sigma_T, X_0, P) \text{ は } \text{cfg}, \\ \# V_N \leq n\}$$

と定義し,  $A = \bigcup_{n=1}^{\infty} A(n)$  とおこう。

本稿では, control grammar とは, cfg  $G = (V_N, \Sigma_T, X_0, P)$   
と,  $P$  上の language  $C$  との対  $(G, C)$  を意味することと  
する。 $(G, C)$  によって生成される language  $L(G, C)$  は

$$L(G, C) = \{w \in \Sigma_T^* \mid \exists \alpha \in C, X_0 \xrightarrow{G}^* w\}$$

で定義する。

一般に,  $\mathcal{L}$  を languages の family とするとき,  $\gamma^\lambda(\mathcal{L})$ ,  
 $\gamma(\mathcal{L})$  をそれぞれ次のように定義する。

$$\gamma^\lambda(\mathcal{L}) = \{L(G, C) \mid C \in \mathcal{L}\},$$

$\gamma(L) = \{ L(G, C) \mid C \in L, G \text{ は } \lambda\text{-free cfg} \}$

regular languages 全体を  $R$ , matrix languages 全体を  $M^\lambda$  と書くことにすれば、よく知られているように、 $M^\lambda = \gamma^\lambda(R)$  となる (Salomaa [2], 1970)。

## §2. Q-automata と $\lambda^*$

$\hat{\gamma}(A)$  を受理する automata として、Q-automata を定義しよう。 $N, Z$  でそれぞれ自然数全体、整数全体を表わすこととする。又、一般に、二項関係  $P$  に対して、 $P^*$  で、 $P$  の reflexive transitive closure を表わすことにする。

定義 2. Q-automaton とは次のような六つ組  $M = (n, K, \Sigma, q_0, F, P)$  である。

- (i)  $n$  は正整数で、 $M$  の degree と呼ばれる。
- (ii)  $K$  と  $\Sigma$  とは alphabets で、 $K \cap \Sigma = \emptyset$ 。
- (iii)  $q_0 \in K$ ,  $F \subseteq K$ .
- (iv)  $P$  は  $K \times (\Sigma \cup \{\lambda\}) \times K \times N^n \times N^n$  の有限部分集合。 $P$  が特に  $K \times \Sigma \times K \times N^n \times N^n$  の部分集合であるとき、 $M$  を  $\lambda$ -free と呼ぶ。

$K \times \Sigma^* \times N^n$  上の二項関係  $\xrightarrow{M}$  を次のように定義する。

$(p, a, q, x, y) \in P$ ,  $w \in \Sigma^*$ ,  $z \in N^n$  のとき、 $z \geqq x$  ならば、

$$(p, aw, z) \xrightarrow{M} (q, w, z - a + y)。$$

$Q$ -automaton  $M$  の受理する language  $L(M)$  は次で定義する。

$$L(M) = \{ w \in \Sigma^* \mid \exists p \in F, (q_0, w, o_n) \xrightarrow{M}^* (p, \lambda, o_n) \}.$$

$$\text{ここで } o_n = (0, 0, \dots, 0) \in N^n.$$

各  $n \geq 1$  に対して, degree  $n$  の ( $\lambda$ -free)  $Q$ -automata で受理される languages 全体を  $\mathcal{L}^\lambda(n)$  ( $\mathcal{L}(n)$ ) で表わし,  
 $\mathcal{L}^\lambda = \bigcup_{n=1}^{\infty} \mathcal{L}^\lambda(n), \quad \mathcal{L} = \bigcup_{n=1}^{\infty} \mathcal{L}(n)$  と書くことにしよう。

定義 3.  $\mathcal{L}, \mathcal{L}_1, \mathcal{L}_2$  を languages の families としよう。

$$\mathcal{L} + (\lambda) = \mathcal{L} \cup \{ L \cup \{\lambda\} \mid L \in \mathcal{L} \}.$$

$$H_p(\mathcal{L}) = \{ h(L) \mid L \in \mathcal{L}, h \text{ は length-preserving homo.} \}.$$

$$H_d(\mathcal{L}) = \{ h(L) \mid L \in \mathcal{L}, h \text{ は decreasing homo.} \}.$$

$$\mathcal{L}_1 \wedge \mathcal{L}_2 = \{ L_1 \cap L_2 \mid L_1 \in \mathcal{L}_1, L_2 \in \mathcal{L}_2 \}.$$

各  $n \geq 1$  に対して,  $\wedge^n$  もを次のように定義する。

$$\wedge^1 \mathcal{L} = \mathcal{L}, \quad \wedge^{m+1} \mathcal{L} = (\wedge^m \mathcal{L}) \wedge \mathcal{L}.$$

$\mathcal{L}$  を含む最小の (full) semi-AFL を  $\mathcal{S}(\mathcal{L})$  ( $\hat{\mathcal{S}}(\mathcal{L})$ ) で表わす。特に,  $\mathcal{L} = \{L\}$  のとき,  $\mathcal{S}(L)$  ( $\hat{\mathcal{S}}(L)$ ) と略記し,  $L$  を  $\mathcal{S}(L)$  ( $\hat{\mathcal{S}}(L)$ ) の (full)  $m$ -generator と呼ぶ。

$\mathcal{L}$  を含んで intersection で閉じている最小の (full) semi-AFL は  $\bigcup_{n=1}^{\infty} H_p(\wedge^n \mathcal{S}(\mathcal{L}))$  ( $\bigcup_{n=1}^{\infty} H_d(\wedge^n \mathcal{S}(\mathcal{L}))$ ) で表わされる。  
([3], [4] 参照)

定理1. 各  $n \geq 1$  に対して,

$$\alpha(n) = H_p(\wedge^n \alpha(1)), \quad \alpha^\lambda(n) = H_d(\wedge^n \alpha(1)).$$

$\alpha(n)$  は semi-AFL,  $\alpha^\lambda(n)$  は full semi-AFL である。

定理2.  $D_1$  を 1-Dyck language とすると,

$$\alpha(1) = \mathcal{S}(D_1).$$

系1. 各  $n \geq 1$  に対して,

$$\alpha(n) = H_p(\wedge^n \mathcal{S}(D_1)), \quad \alpha^\lambda(n) = H_d(\wedge^n \mathcal{S}(D_1)).$$

系2.  $\alpha(\alpha^\lambda)$  は  $D_1$  を含んで intersection で閉じて  
いる最小の (full) semi-AFL である。

定義4.  $\Sigma$  上の languages  $L_1, L_2$  に対して,

$$\text{Shuffle}(L_1, L_2) = \{x_1y_1\cdots x_ny_n \mid n \geq 1, x_1\cdots x_n \in L_1, \\ y_1\cdots y_n \in L_2, \forall x_i, y_i \in \Sigma^*\}$$

と定義する。このとき,  $L_1 \subseteq \Sigma_1^*$ ,  $L_2 \subseteq \Sigma_2^*$ ,  $\Sigma_1 \cap \Sigma_2 = \emptyset$  とす  
ると,  $H_p(\mathcal{S}(L_1) \wedge \mathcal{S}(L_2)) = \mathcal{S}(\text{Shuffle}(L_1, L_2))$ ,

$$\begin{aligned} H_d(\mathcal{S}(L_1) \wedge \mathcal{S}(L_2)) &= H_d(\widehat{\mathcal{S}}(L_1) \wedge \widehat{\mathcal{S}}(L_2)) \\ &= \widehat{\mathcal{S}}(\text{Shuffle}(L_1, L_2)) \end{aligned}$$

となる (Ginsburg, Greibach [4], 1970)。この結果を利用

用して、各  $\alpha(n)$  の m-generator を求めることができる。

各  $n \geq 1$  に対して、 $D_1^{(n)}$  を cfg

$$G_n = (\{X\}, \{a_n, b_n\}, X, \{X \rightarrow XX, X \rightarrow a_n X b_n, X \rightarrow \lambda\})$$

で生成される 1-Dyck language とし、language  $Q(n)$  を、

$$Q(1) = D_1^{(1)},$$

$$Q(m+1) = \text{Shuffle}(Q(m), D_1^{(m+1)})$$

で定義する。

系3. 各  $n \geq 1$  に対して、

$$\alpha(n) = \delta(Q(n)), \quad \alpha^*(n) = \hat{\delta}(Q(n)).$$

$\alpha(n) \supseteq \alpha^*(n)$  及び  $Q(n) \in \delta(\alpha(n)) + (\lambda)$  を示すことによつて次の定理を証明することができる。

定理3. 各  $n \geq 1$  に対して、

$$\alpha(n) = \delta(\alpha(n)) + (\lambda), \quad \alpha^*(n) = \hat{\delta}(\alpha(n)).$$

系4.  $\alpha = \delta(\alpha) + (\lambda), \quad \alpha^* = \hat{\delta}(\alpha).$

次に  $\alpha^*$  に含まれている languages の例をいくつかあげよう。

定理4. 各  $n \geq 1$  に対して,

$$A(n) = \{x \in x^R \mid x \in (a^* b)^{n-1} a^*\},$$

$$A'(n) = \{a^{k_1} b \dots b a^{k_n} c a^{r_n} b \dots b a^{r_i} \mid \forall i, k_i \geq r_i \geq 0\},$$

$$B(n) = \{x \in x \mid x \in (a^* b)^{n-1} a^*\},$$

$$B'(n) = \{a^{k_1} b \dots b a^{k_n} c a^{r_1} b \dots b a^{r_n} \mid \forall i, k_i \geq r_i \geq 0\}$$

とおく。各  $n \geq 1$  に対して,

$$A(n+1), A'(n+1), B(n+1), B'(n+1) \in \mathcal{Q}(n+1) - \mathcal{Q}(n).$$

系5.  $\mathcal{Q}(1) \subset \mathcal{Q}(2) \subset \dots \subset \mathcal{Q}(n) \subset \dots \subset \mathcal{Q}$  は、真の hierarchy である。

系6.  $\{x \in x^R \mid x \in \{a, b\}^*\}$  や  $\{x \in x \mid x \in \{a, b\}^*\}$  は  $\mathcal{Q}$  に含まれない。

私達は定理4が  $\mathcal{Q}(n)$  に対しても成立すると予想しているが、証明はできていない。

例1. 各  $i = 1, 2$  に対して, degree 2 の Q-automaton  $M_i = (2, \{q_0, q_1, q_2, q_3\}, \{a, b, c, d, e\}, q_0, \{q_3\}, P_i)$  を次のように定義しよう。

$$P_1 = \{(q_0, a, q_1, (0, 0), (1, 0)), (q_1, b, q_1, (1, 0), (0, 1)),$$

$(g_1, c, g_2, (0,0), (1,0)), (g_2, d, g_2, (0,1), (1,0)),$   
 $(g_2, a, g_1, (0,0), (1,0)), (g_2, e, g_3, (2,0), (0,0)),$   
 $(g_3, e, g_3, (2,0), (0,0)) \}$ ,

$P_2 = \{ (g_0, a, g_1, (0,0), (1,0)), (g_1, b, g_1, (1,0), (0,1)),$   
 $(g_1, c, g_2, (0,0), (0,0)), (g_2, d, g_2, (0,1), (2,0)),$   
 $(g_2, a, g_1, (0,0), (0,0)), (g_2, e, g_3, (1,0), (0,0)),$   
 $(g_3, e, g_3, (1,0), (0,0)) \}$ 。

例えれば、 $L(M_1)$  の元  $abcdab^3cd^2ab^3cd^4e^3$  の計算過程、及 $w$   
 $L(M_2)$  の元  $abcdab^2cd^2ab^4cd^2abcdabcd^3e^{10}$  の計算過程は  
それぞれ図1、2に示されている。

図1.

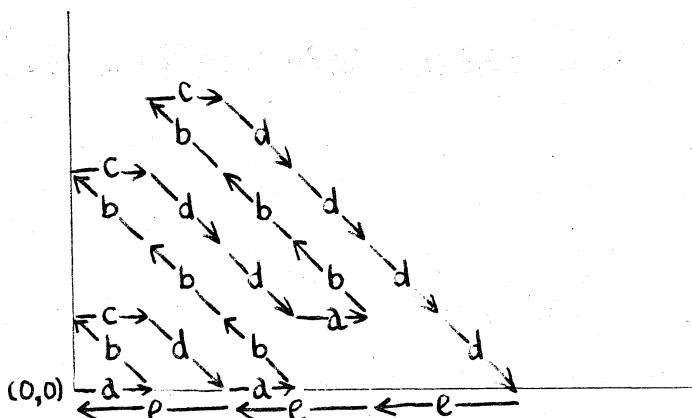
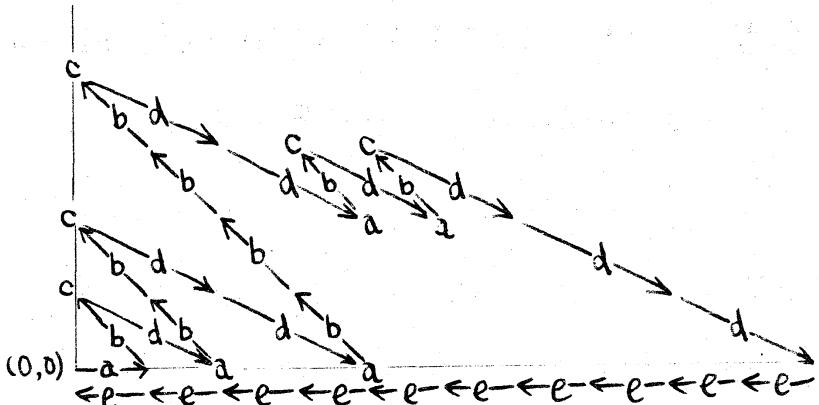


図2.



$\{a, b, c, d, e\}$  上の Parikh mapping を  $\Psi(a) = (1, 0, 0, 0, 0)$ ,  
 $\Psi(b) = (0, 1, 0, 0, 0)$ ,  $\Psi(c) = (0, 0, 1, 0, 0)$ ,  $\Psi(d) = (0, 0, 0, 1, 0)$ ,  $\Psi(e) = (0, 0, 0, 0, 1)$  と定義すると,

$$\Psi(L(M_1)) = \{(n, m, n, m, n) \mid n \geq 1, n^2 \geq m \geq 1\},$$

$$\Psi(L(M_2)) = \{(n, m-1, n, m-1, m) \mid n \geq 1, 2^n \geq m \geq 1\}.$$

従って,  $\{a^n b^m \mid n \geq 1, n^2 \geq m \geq 1\}$  や  $\{a^n b^m \mid n \geq 1, 2^n \geq m \geq 1\}$  は  $\lambda^*(L)$  に含まれる。

### §3. $\lambda^*$ と $M^\lambda$

$\lambda^*$  と  $M^\lambda$  が密接な関係を持っていることは, 次のような事実(定理)及び未解決の問題の同等性(系)から知ることが出来る。

定理5.  $M^\lambda \supseteq \lambda^*$ .

系7.  $M^\lambda$  に対する emptiness problem と,  $\lambda^*$  に対する emptiness problem とは同等である。

定理6.  $M^\lambda = \Psi^\lambda(\lambda^*) = \Psi(\lambda^*) + (\lambda)$ 。更に, 各 matrix language  $L_\lambda$  に対して, 適当な  $\lambda$ -free cfg  $G$  と  $\lambda^*$  の元  $C$  をとることができて,  $L - \{\lambda\} = L(G, C)$  かつ,  $G$  は  $X \rightarrow Y$  ( $X$ ,

$\gamma$  は nonterminals) のような production を持たない。

系 8. context-sensitive languages 全体を  $\mathcal{L}$  としよう。

問題 “ $M^\lambda \subseteq \mathcal{L}$ ?” と 問題 “ $\alpha^\lambda \subseteq \mathcal{L}$ ?” とは 同等である。

Salomaa は [5] (1970) で,  $M^\lambda$  は nonregular one-letter language を含まないという予想を述べている。と, のをそれぞれ commutative languages 全体, bounded languages 全体 としよう。

定理 7.  $M^\lambda \cap \mathcal{B} = \alpha^\lambda \cap \mathcal{B}$ ,  $M^\lambda \cap \mathcal{B} = \alpha^\lambda \cap \mathcal{B}$ .

系 9.  $M^\lambda$  が nonregular one-letter language を含まないということと,  $\alpha^\lambda$  が nonregular one-letter language を含まないということとは 同値である。

§4. commutative automata と  $\mathcal{L}_c^\lambda$

系 7~9 に述べられている問題は 残念ながら 未解決である。  
 $Q$ -automata を少し変形して得られる  $\alpha^\lambda$  の subfamily  $\mathcal{L}_c^\lambda$  について, これらの問題を考えてみよう。  
 $Q$ -automata の 記憶部は, 非負整数の vector であるが, この非負条件を取り

り去、に automata を次のように定義しよう。

定義 5. commutative automaton とは次のような六つ組  $M = (n, K, \Sigma, q_0, F, P)$  である。

(i)  $n$  は正整数で、 $M$  の degree と呼ばれる。

(ii)  $K$  と  $\Sigma$  とは alphabets  $Z^n$ ,  $K \cap \Sigma = \emptyset$ 。

(iii)  $q_0 \in K$ ,  $F \subseteq K$ 。

(iv)  $P$  は  $K \times (\Sigma \cup \{\lambda\}) \times K \times Z^n$  の有限部分集合。

特に  $P \subseteq K \times \Sigma \times K \times Z^n$  のとき、 $M$  を  $\lambda$ -free と呼ぶ。

$K \times \Sigma^* \times Z^n$  上の二項関係  $\xrightarrow{M}$  を次のように定義する。

$(p, \alpha, q, x) \in P$ ,  $w \in \Sigma^*$ ,  $y \in Z^n$  のとき、

$(p, \alpha w, q, y) \xrightarrow{M} (q, w, p, x+y)$ 。

$M$  の受理する language  $L(M)$  は次で定義される。

$$L(M) = \{ w \in \Sigma^* \mid \exists p \in F, (q_0, w, 0_n) \xrightarrow{M}^* (p, \lambda, 0_n) \}.$$

各  $n \geq 1$  に対して、degree  $n$  の ( $\lambda$ -free) commutative automata で受理される languages 全体を  $\mathcal{L}_C^\lambda(n)$  ( $\mathcal{L}_C(n)$ ) で表わし、 $\mathcal{L}_C^\lambda = \bigcup_{n=1}^{\infty} \mathcal{L}_C^\lambda(n)$ ,  $\mathcal{L}_C = \bigcup_{n=1}^{\infty} \mathcal{L}_C(n)$  とおく。

定理 8. 各  $n \geq 1$  に対して、

$$\mathcal{L}_C(n) = H_p(\wedge^n \mathcal{L}_C(1)), \quad \mathcal{L}_C^\lambda(n) = H_d(\wedge^n \mathcal{L}_C(1)).$$

定理9.  $\mathcal{L}_c(1) = \mathcal{S}(0)$ 。ここで、

$$O = \{ w \in \{a, b\}^* \mid N_a(w) = N_b(w) \},$$

$N_e(w)$  は  $w$ に現われる symbol  $e$  の個数を示す。

系10. 各  $n \geq 1$  に対して、

$$\mathcal{L}_c(n) = H_p(\wedge^n \mathcal{S}(0)), \quad \mathcal{L}_c^\lambda(n) = H_d(\wedge^n \mathcal{S}(0)).$$

系11.  $\mathcal{L}_c$  ( $\mathcal{L}_c^\lambda$ ) は  $O$ を含んで intersection で閉じている最小の (full) semi-AFL である。

定義6. 各  $n \geq 1$  に対して, dimension  $n$  の origin-crossing language  $O(n)$  を

$$O(n) = \{ w \in \{a_1, b_1, \dots, a_n, b_n\}^* \mid \forall i, N_{a_i}(w) = N_{b_i}(w) \}$$

で定義する (Fischer et al., 1968)。

系12. 各  $n \geq 1$  に対して、

$$\mathcal{L}_c(n) = \mathcal{S}(O(n)), \quad \mathcal{L}_c^\lambda(n) = \hat{\mathcal{S}}(O(n)).$$

定理10. semilinear property を持つ commutative languages 全体を  $\mathcal{C}_{SL}$  と表わすことにはすれば、

$$\mathcal{L}_c = \mathcal{S}(\mathcal{C}_{SL}), \quad \mathcal{L}_c^\lambda = \hat{\mathcal{S}}(\mathcal{C}_{SL}).$$

従って,  $\mathcal{L}_C^\lambda$  に対する emptiness, finiteness problems は帰納的に可解となり, かつ又,  $\mathcal{L}_C^\lambda$  は nonregular one-letter language を含まない (Ginsburg, Spanier [7], 1971)。

定理 11. 各  $n \geq 1$  に対して,  $\mathcal{L}_C^\lambda(n) = \mathcal{L}_C(n)$ 。

命題 13.  $\mathcal{L}_C^\lambda = \mathcal{L}_C$ , 即ち,  $\Phi(\mathcal{L}_{SL}) = \Phi(\mathcal{L}_{SL})$ 。

deterministic context sensitive languages 全体を  $\text{CS}^d$  と表わすことにしてよう。 $\text{CS}^d$  は intersection で閉じている AFL で, context-free languages (cfl's と略記) 全体  $\mathcal{L}$  を含んでいる。 $\mathcal{O}$  は cfl であるから次の定理が成立する。

定理 12.  $\mathcal{L}_C^\lambda = \Phi(\mathcal{L}_{SL}) \subseteq \text{CS}^d$ 。

$\mathcal{L}_C^\lambda$  を利用すると, [7] で残された「 $\mathcal{L}_{SL}$  によって生成される full AFL  $\hat{\Phi}(\mathcal{L}_{SL})$  は full principal AFL であるか。」という問題を解くことができる。 $A(n), A'(n), B(n), B'(n)$  は 定理 4 で定義された languages とする。

定理 13. 各  $n \geq 1$  に対して,

$$C(n) = \{ (a^k c)^n a^k \mid k \geq 0 \}$$

とおく。各  $n \geq 1$  に対して、

$$A(n+1), A'(n+1), B(n+1), B'(n+1), C(n+1) \in \mathcal{L}^\lambda(n+1) - \mathcal{L}^\lambda(n)。$$

languages の family  $\mathcal{L}$  に対して、 $\mathcal{L}$  を含んでいたり（ $\mathcal{L}$  を含んで） $\lambda$ -free substitution で閉じている）最小の AFL を  $F(\mathcal{L})$  ( $F_\lambda(\mathcal{L})$ ) で表わすことにして。 $B(n), C(n)$  は  $\mathcal{L}$  のような強い性質を持っている。language  $L$  が 性質 (I3) ((I2)) を持っているとき、 $L$  を type 3 (type 2) の invariant language と呼ぶ ([8] の Part 3 参照)。

(I3) 任意の semi-AFL  $\mathcal{L}$  に対して、 $L$  が  $F(\mathcal{L})$  に含まれれば、 $L$  は  $\mathcal{L}$  に含まれる。

(I2) 任意の semi-AFL  $\mathcal{L}$  に対して、 $L$  が  $F_\lambda(\mathcal{L})$  に含まれれば、 $L$  は  $\mathcal{L}$  に含まれる。

$A(n), B(n), C(n)$  は type 3 の invariant language であり、更に、 $n \geq 2$  であれば、 $B(n), C(n)$  は type 2 の invariant language である。従って次の系が得られる。

系 14.  $\hat{F}(\mathcal{L}_S)$  は full principal AFL ではない。

系 15. 次の包含関係は 真の包含関係である。

$$\begin{aligned} \mathcal{L}_C^\lambda(1) &\subset \mathcal{L}_C^\lambda(2) \subset \cdots \subset \mathcal{L}_C^\lambda(n) \subset \cdots \subset \mathcal{L}_C^\lambda \quad (= \hat{\gamma}(\mathcal{E}_{SL})) \\ \hat{\gamma}(\mathcal{L}_C^\lambda(1)) &\subset \hat{\gamma}(\mathcal{L}_C^\lambda(2)) \subset \cdots \subset \hat{\gamma}(\mathcal{L}_C^\lambda(n)) \subset \cdots \subset \hat{\gamma}(\mathcal{L}_C^\lambda) \quad (= \hat{\gamma}(\mathcal{E}_{SL})) \\ \hat{\phi}_\alpha(\mathcal{L}_C^\lambda(1)) &\subset \hat{\phi}_\alpha(\mathcal{L}_C^\lambda(2)) \subset \cdots \subset \hat{\phi}_\alpha(\mathcal{L}_C^\lambda(n)) \subset \cdots \subset \hat{\phi}_\alpha(\mathcal{L}_C^\lambda) \quad (= \hat{\phi}_\alpha(\mathcal{E}_{SL})). \end{aligned}$$

但し、 $\mathcal{L}_C^\lambda$  が AFL でないことは、 $(C(1)_b)^*$   $\notin \mathcal{L}_C^\lambda$  からわかる。

最後に、 $\mathcal{L}_C^\lambda$  は、 $\mathfrak{A}$  の subfamily であることに注意しよう。

定理 14. 各  $n \geq 1$  に対して、 $\mathfrak{A}(2n) \subset \mathcal{L}_C^\lambda(n)$ 。

系 16.  $\mathfrak{A}$  かつ  $\mathcal{L}_C^\lambda$ 。この包含関係は、 $\mathfrak{A}$  が semilinear property を持たない（例 1）から、真の包含関係である。

### §5. まとめ

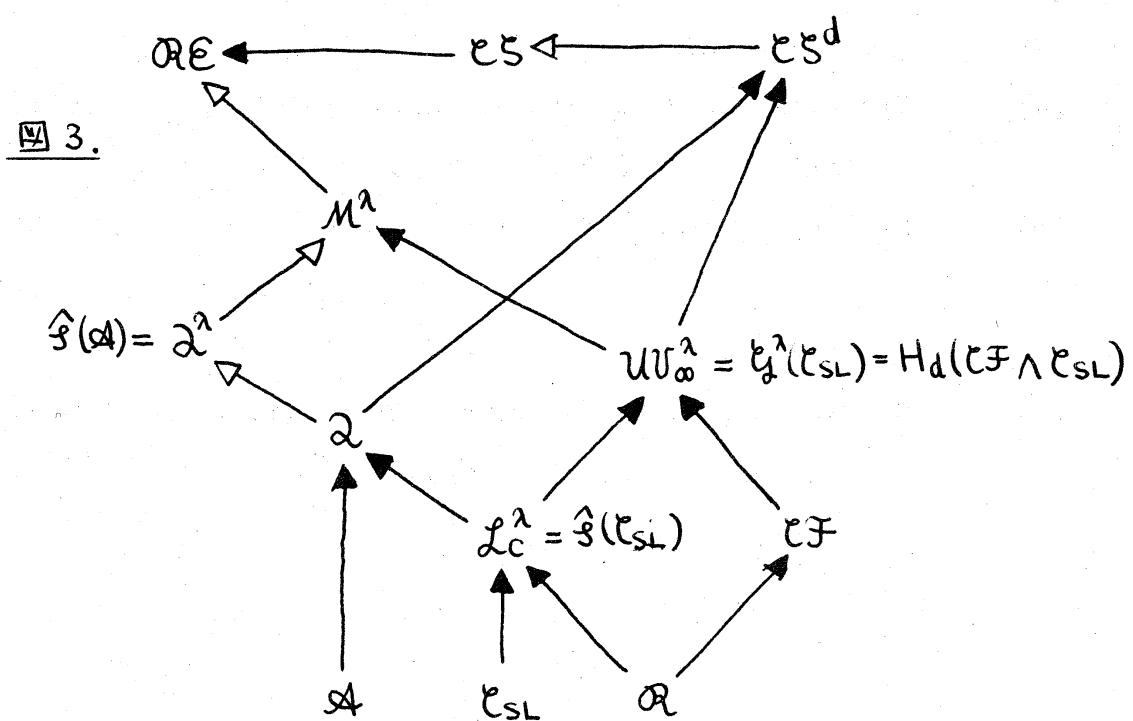
系 7 ~ 9 で述べられている  $M^\lambda$  に対する問題は、 $\mathfrak{A}^\lambda$  に対する問題と制限しても同等であること (§3)，及び、 $\mathfrak{A}^\lambda$  の subfamily  $\mathcal{L}_C^\lambda$  に対する問題と制限すれば解決されること (§4) をみてきた。 $\mathcal{L}_C^\lambda$  に対する結果は、Cremers と Mayer ([9], [10]) によって定義された generalized unordered vector languages 全体  $UV_\infty^\lambda$  にまで拡張できることを注意しておこう。

定理 15.  $UV_\infty^\lambda = \hat{\gamma}^\lambda(\mathcal{E}_{SL}) = \hat{\gamma}(\mathcal{E}_{SL}) + (\lambda) = UV_\infty + (\lambda)$ 。更

に、 $UV_{\infty}^{\lambda}$  の元  $L$  に対して、適当な  $\lambda$ -free cfg  $G$  と  $CSL$  の元  $C$  をとることができて、 $L - \{\lambda\} = L(G, C)$  かつ  $G$  は  $X \rightarrow Y$  ( $X, Y$  は  $G$  の nonterminals) のような production を持たない。

系 17.  $UV_{\infty}^{\lambda} \subseteq CS^d$ 。

本稿で述べた families の包含関係は、図 3 のように表わすことができる。



$RE$  は recursively enumerable languages 全体をさしている。

$\leftarrow$  は、包含関係が真であることを示し、 $\rightarrow$  は、包含関係が真であるかどうか未解決であることを示している。

本稿では省略した定理の証明等の詳細は筆者の論文[8]を参照されたい。

### 参考文献

- [1] E. Moriya, Associate languages and derivational complexity of formal grammars and languages, Information and Control 22 (1973), 139-162.
- [2] A. Salomaa, Periodically time-variant context-free grammars, Information and Control 17 (1970), 294-311.
- [3] S. Greibach and S. Ginsburg, Multitape AFA, J. Assoc. Comput. Mach. 19 (1972), 193-221.
- [4] S. Ginsburg and S. Greibach, Principal AFL, J. Comput. System Sci. 4 (1970), 308-338.
- [5] A. Salomaa, On some families of formal languages obtained by regulated derivations, Ann. Acad. Sci. Fenn., Ser. AI. 479 (1970).
- [6] P. C. Fischer, A. R. Meyer, and A. L. Rosenberg, Counter machines and counter languages, Math. Systems Theory 2 (1968), 265-283.
- [7] S. Ginsburg and E. H. Spanier, AFL with the semilinear property, J. Comput. System Sci. 5 (1971), 365-396.
- [8] 田中, Elementary methods for formal language theory and matrix languages, 東大修士論文.
- [9] A. B. Cremers and O. Mayer, On matrix languages, Information and Control 23 (1973), 86-96.
- [10] A. B. Cremers and O. Mayer, On vector languages, J. Comput. System Sci. 8 (1974), 158-166.